

陳舜臣さんを語る会通信

NO.109 Jan. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2024年1月10日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

天安門事件について、陳舜臣さんの文章が載った紙誌

陳舜臣さんの、文化大革命に対する反応は、不思議なほど鈍かった。それに対し、天安門事件に対しては、いくつかの紙誌を見るに、はっきりと物を言い、翌年（1990年）10月、国籍（中華人民共和国）をも棄てられた（日本国籍取得）。本号は、資料掲載を第一目的として発行しました。

本号は、紙誌のコピー、その他情報提供など、安井三吉先生のご教示に負うところすこぶる大です。感謝！

天安門事件■1989年6月4日、天安門広場を中心に起きた、民主化運動の武力弾圧事件。同年4月の胡耀邦の追悼式をきっかけに広がった学生らの運動が、「反革命暴乱」として、人民解放軍の戒厳部隊により戦車と銃口で制圧された事件。
(編集委員 橋雄三)

一九八九年六月六日『朝日新聞』

傍線は編集委員の加筆



銃口から政権がうまれるとは、たしか毛沢東のことばだが、これはまちがっている。彼らが土豪劣紳といわれる連中と戦っていたころ、しいたげられ、搾取されていた人たちが、彼らの味方になった。人心を得て彼らは勝ったのであり、人心から政権がうまれると言ひ直さねばならない。いま中国の権力集団は、銃口によって政権を守ろうとしている。政権を守るのには、じつは人心であることを知らない。なんとという無知であろうか。

権力闘争に勝ち抜いた人たちのなかには、上司にへつらい、同僚をおとしめられる術にばかりたけて、ついに人間の心を失う者もでてくる。権力は魔物でもある。そんな人間の皮をかぶった化け物たちが、人間ではできないはずの今回の悲しむべき事件をおこしたのだ。

権力はどうしても腐敗をうむ。それだけに、しつかりしたチェック

ク機能はたらかねばならない。だが、一党独裁ではそれがはたらきにくい。

現代中国の幹部の墮落はその極に達している。幹部子弟が悪行の限りを尽くしていることはもうだれもが知っている。いまや中国の権力集団は、かつて彼らの先輩が戦った相手である「土豪劣紳」そのものになってしまった。

私には眠れない夜がつづいた。なによりも目前の命を救われねばならない。これ以上、尊い命が化け物たちに奪われるのを防がねばならない。広い中国には、どこにもかくにも和解させる名人がいるにちがいない。土豪劣紳退治はあとまわしにしても、一人でも多くの命が救われるように、そんな名人の出現を祈るのみである。



彼らが「土豪劣紳」と戦っていたころ

一九九三年十二月、毛沢東生誕百年を記念して放映された『NHKスペシャル 毛沢東とその時代』の中で、井岡山茅坪村の張桂庭さんが話している。

「毛主席は朱徳総指令と一緒に、よくこの辺りを通ったよ。ボロボロの服を着て、帽子を被ってな。村の人たちは毛主席と朱徳総指令を、毛委員、朱軍長と呼んでいた。毛主席はここで民衆にお米をやったり、子どもを救ったり、民衆のために草鞋を編んだりしたんだ。毛主席はわれわれの恩人だ」

張桂庭さんは、話しているうちに昔のことを思い出し、気分が高じてきたのか、当時よく歌っていたという歌を歌いだす。

♪土豪を打倒しよう、劣紳を打倒しよう
土豪、劣紳を打倒して土地を分配しよう
土地を分配して、中央紅区の人々は紅軍を讃える

円満な幸福は毛委員に頼る
貧乏人は立ち上がり、さらなる闘争を忘れない



せいこうざんマオピン
井岡山茅坪村、村の市
1997年 編集委員撮影

「黒い男 — 中国の変革と若者たち —」(河北新報 1989.7.7)

岩波文庫『故事新編』「剣を鍛える話」補足

魯迅は、一九二六年の三・一八事

に父の死の真相を話します。

魯迅が「剣を鍛える話」を書いた図書館(集美楼)は、いま「魯迅記念館」

件のあと、厦門大学の招きで南下し、

父は天下第一の剣作りで、大王か

思えば、まだ去年、厦門島に引

秋には、大学の図書館(集美楼)に

ら、王妃が産み落とした鉄の玉で剣

こもっていたところだが、ひどく人に

住んでいました。岩波文庫『故事新

を鍛えることを命じられ、三年の精

嫌われて、とうとう「鬼神を敬して

編』の「序言」から「剣を鍛える話」

進の末に、雄剣、雌剣、二振りの剣

之を遠ざく」式の待遇を受け、図書

(原題「鑄劍」)。発表当時の題は

を鍛え上げます。父は、へ剣を献上

館の楼上の一室に祭りあげられた。

「眉間尺」)がここで書かれたこと

する日はわしの命の尽きる日でもあ

。夜九時を過ぎると、みな散り散

がわかります。

る。たぶんこれが永の別れになるだ

りに帰ってしまつて、巨大な洋館の

この作品は、文中、時代の特定は

ろう」と言い残し、雌剣を持つて家

なかに、私のほかには人っ子ひとり

ありませんが、訳註によると、「時

を出、その通りになりました。

いなくなつた。私は、静寂のなかに

代は不明だが、ほぼ戦国時代と見て

成人した眉間尺は父が鍛えた雄剣

むと、突元とした岩山に、たくさん

よい」とあります。

この後は、陳舜臣さんの記事をお

の白い点が見える。墓の群である。

父の死の時、まだ母の胎内にいた

を携え城内へと向かいます。

ぼつんと黄色い火の見えるのは、南

眉間尺でしたが、へ子の刻を過ぎれ

読み下さい。

の白い点が見える。墓の群である。

黒い男



中国の変革と若者たち

陳舜臣

Main body of the article text, including the title '黒い男' and the author's name '陳舜臣'. The text discusses the historical context of the book and the author's perspective on the 'Black Man' and the youth of China during the 1920s.



河北新報に寄稿した「黒い男」は同じタイトルで『曼陀羅の人』に収録されています。このほかに、天安門事件に対する発言が収録されているエッセイ集があるのでしようか。

「黒い男」は『曼陀羅の人』に収録



普陀寺の瑠璃灯だ。前面は海と空がひとつになって、黒棉のような夜色に包まれている。(『魯迅評論集』竹内好訳。岩波文庫) 左は厦門大学「魯迅記念館」一九九六年、編集委員撮影

「ああ老独裁者に血ぬられた母国の民よ」(『現代』1989.8 講談社)



「ああ老独裁者に血ぬられた母国の民よ」要約

副題に「中国四千年の教訓はどこへ」とあるように、又、文中、「天安門の惨事をテレビでみたとき、私は漢の武帝の晩年の悲劇を連想した。現実のテレビの画面を、過去の歴史の場面に重ね合わせるのには、奇妙な癖だと笑われるかもしれないが、性癖だから仕方がない」と自らおっしゃるように、陳舜臣さんは、中国の歴史上の出来事から説き起す。

記述は、冒頭、漢の高祖(在位前二〇二〜前一九五)の最晩年の出来事から始まり、続いて、同じく前漢の時代、武帝の晩年の出来事に筆が及ぶ。どちらも、血塗られた残忍な

弾圧であった。多くの人が殺され、自殺した。陳さんは、「年をとると、現実を構成するさまざまな要因を見きわめる判断力が低下する。それなのに、思考硬直と視野狭窄によって、決断力のみ独善的にとぎすまされる。二千年以上も前の巫蠱の乱と、天安門惨事とを、私はべつに強引に重ね合わせようとするのではない。天安門の悲劇とは、素手の学生や市民が民主化を要求したのにたいして、軍隊が武力鎮圧したの

である。…二十世紀の常識では、きわめて基本的で、つましい民主化を要求し、政治の腐敗を糾弾したのである。学生や市民たちは、一切の暴力を用いていない。彼らは「話し合い」を求めただけなのだ。根本的に異なる事件だが、残忍な弾圧が、老いたる独裁者の決断によって加えられたところに共通点がある」と強調する。上の毎日新聞(一九八九年六月十日)の写真、鄧小平は老独裁者、その人である。

特別寄稿 中国四千年の教訓はどこへ
ああ老独裁者に血ぬられた
母国の民よ

「老いぬるを奈何せん」と嘆じた漢の高祖も、太陽王と畏敬された武帝も、ともに晩節を血で汚した。視野狭窄の老人は、決断力のみ肥大し、犠牲となった人民の怨みは果てなく

人蔭にされた戚夫人

八十歳以上の老人が勢ぞろいするという場面が、テレビに放映された。事態を安定させるのだという。それをみているうちに、私は二千八百八十四年前のある場面を『史記』で読んだことを思い出した。

漢の高祖の十二年(前一九五年)というから、彼が死んだ年にあたる。死の直前に、彼は後継者を変えようとおもっていた。正妻の呂後の生んだ盈(のちの恵帝)が太子に立てられていたが、

高祖は彼が軟弱で、自分に似ていないのが不満であった。そのころ、彼は戚夫人を寵愛し、彼女からせがまれたこともあって、彼女のうんだ如意を太子にしようとおもっていた。

黥布の反乱軍を撃破して帰還し、宴會がひらかれたときのことである。太子盈のそばに、四人の老人がはべっていた。

——年は皆を八十有余、鬚眉は皓白、衣冠甚だ偉なり。

と、『史記』留侯世家にみえる。高祖はあやしんで、彼らは何者かと

訊ねたところ、四人はそれぞれ名乗った。

東園公。角里先生。綺里季。夏黄公。その名をきいて高祖は大いに驚いた。この四人は長いあいだ、高祖が召し出そうとしたのに、それに応じなかった人物である。

——わしは公らを求めたのに、公らはわしを避けて逃げておった。それなのに、公らはなぜ我が子につき従って

問われて四老は答えた。——陛下は士を軽んじてよく罵りま



陳舜臣 (作家)

「血で書かれた事実」は隠せない(『文藝春秋』1989.8)

抜粋・活字起しします。傍線は編集委員の加筆。最初にあげた箇所は陳舜臣作品で何度か読んだことがありますが。自家薬籠中のものなのでしょう。

春秋斉の宰相崔杼と史官

紀元前五四八年、孔子誕生の三年後のこと、山東半島にあった斉の国で、大夫(宰相)の崔杼が主君の莊公を殺し、弟の景公を立てる事件がおこった。

太史(中央の史官)は、
一 崔杼、その君を弑す。

と記録した。崔杼は怒ってその太史を殺した。だが、太史の弟がまた同じことをした。そこで崔杼はまた殺した。三番目の弟がまたおなじことを書きつけた。

一 乃ち之を舍く。

と、「春秋左氏伝」にある。さすがの崔杼も三人目は殺さずに、そのままにしたという。話はまたすこしつづく。

一 南史氏(地方の史官)、太史(中央の史官)を執りて以て往く。既に書せりと聞き乃ち還る。

このエピソードは、言論が封殺されようとするとき、中国ではかならず思い起こされたものである。

天安門事件の記録に映像が武器に

一九八九年六月四日は、正確に記録されなければならない。幸い現代では、ペンのほかに映像が記録の有力な武器となっている。

一 天安門では死者は一人もなかった。

というのが公式の記録になるらしいが、スポークスマンのこのことばは、「これからの発言はみなウソです」という前置きのつもりであろう。

魯迅の筆法

一九二六年三月十八日、天安門前に集まった学生や市民が、段祺瑞政府に請願デモをかけたところ、軍隊が発砲し、死者四十七名、負傷者百五十名以上を出した。

死者の一人、北京女子師範大学の学生劉和珍は、魯迅の教え子であった。魯迅は「花なきバラ」其二と題した文章のなかに、
一 墨で書かれた虚言は、血で書かれた事実を隠すことはできない。
と、しるしている。おなじころ

に、魯迅は「空論」と題する短文を書き、
一 今度の事件での死者が、来者にのこしてくれた贈りものは、多くのしろものの仮面を引きはがして、人間の相の下にかくされていた思いもよらぬ凶悪さを暴露してくれたことである。あとにつづく戦士は、それに学んで当然、ちがった戦法をとらねばならない。
と、結んでいる。

傍線の箇所は、本号3ページの「黒い男」の記述に繋がります。

「血で書かれた事実」は隠せない 歴史に照らして

権力によって歪曲された歴史は必ず正される

陳舜臣 (作家)



紀元前五四八年、孔子誕生の三年後のこと、山東半島にあった斉の国で、大夫(宰相)の崔杼が主君の莊公を殺し、弟の景公を立てる事件がおこった。
太史(中央の史官)は、
崔杼、其の君を弑す。

と、記録した。崔杼は怒ってその太史を殺した。だが、太史の弟がまた同じことをした。そこで崔杼はまた殺した。三番目の弟がまたおなじことを書きつけた。

一 乃ち之を舍く。

と、「春秋左氏伝」にある。さすがの崔杼も、三人目は殺さずに、そのままにしたという。話はまたすこしつづく。

一 南史氏(地方の史官)、太史(中央の史官)を執りて以て往く。既に書せりと聞き、乃ち還る。

中央の史官がすべて殺されたとき、地方の史官が筆記道具を背負って、中央に出かけた。もちろん殺される覚悟である。だが、三番目の太史が記録したとき、やっと地方に帰った。

このエピソードは、言論が封殺されようとするとき、中国ではかならず思い起こされたものである。
真実は、死をかけても、正しく記録されるべきだ。記録されたものが、歴史を編集するときの資料となる。まちがった記録は、歴史をまげることにはかならない。

文天祥(一二三六~一二八二)は、南宋復興の拳破れて元の捕虜となり、フビライ汗の説得を拒んで死をえらんだ。獄中で作った「正気の歌」はあまりにも有名である。
天地に正気があるが、これは正しいエネルギーであり、さ

陳さんの二・二八事件回想、文化大革命観ほか

陳さんの二・二八事件回想

私がきいた銃声で、いったいどれほどの台湾人が命を落としたであろうか。

ただ銃声だけをきいていたというのは口惜しいことであつた。その音とともに、同胞の命が一つまた一つと消えて行くことを、そのとき実感できなかったことにたいして、私はいまでも罪悪感をもっている。そのとき、おまえはどんな気持ちでその音をきいていたのか、と問われると、――祈りをこめてきいていたと、答えるしかなかっただろう。

なにを祈るかといえば、げんにきこえてくるのが、おぞましい殺人銃弾の音ではなく、威嚇のための空砲の音であれかし、という祈りであつた。音をきくだけで、真相はまったくわからないのである。真相に近い話をきいたのは、だいぶのちになってからである。（『道半ば』）

二・二八事件を回想し、陳舜臣さんはこのように記しています。台北での出来事を、音として、帰郷中の新荘で聞いたのです。

陳さんの文化大革命観

本通信第23号再掲

文化大革命では、劉少奇、彭徳懐など実権派（走資派）と称される人たちだけでなく、老舎のような作家、そして一般の市民までが紅衛兵による攻撃のターゲットとなり、その糾弾・暴行で、多くの人が傷害を受け、また、命を落としました。

陳さんは、文化大革命のよな例として、中国史上の始皇帝の変革、王莽の「新」、洪秀全の「太平天国」をあげ、当事者三人を、「人間の精神の改造を志したロマンチスト」と、むしろ肯定的に評価し、毛沢東についても、また、同じ文脈で話されています。不思議です。

さらに、談話の中で、「焼殺」を「黙殺」「悩殺」と同じ用例とし、「中国の殺すということばは意味を強めるだけで、血のにおいのないことば」とおっしゃっています。陳さんの、文化大革命に対する認識の甘さはどこからきているのでしょうか。

『虹の舞台』の陶展文

『虹の舞台』は一九七三年の執筆です。陳さんはこの作品で、陶展文をつぎのように描いています。

陶展文は目をとじた。かつて生きたげられた国の人間として生まれた彼は、独立のために戦ったボースの姿に感動したのである。

慚愧の念もあつた。

ボースは戦つたのに、自分は戦いから逃げたのではないか？――陶展文が目をはらくと、大泉邸の椿の花が、

（紅い花もあれば、白い花もあるのよ）

と、囁きかけるような気がした。

チャンドラ・ボースに負い目を感じているような記述です。

この執筆は49歳の時で、この執筆のすぐ後、中華人民共和国籍をとって、中国（西安から甘肅、新疆へ）旅行をしています。

天安門事件は65歳の時です。でも、基本的に、陳舜臣さんの思いは同じではないかとも思います。

『中国の歴史 近・現代篇』途中打ち切りの理由

『陳舜臣中国ライブラリー4』（2001 集英社）「自作の周辺」稲畑耕一郎氏との対談から引用します。

陳 第4巻でストップしたんです。いろいろ事情があるんですけども、第一には、新しい資料が出てくる時代になっていて、もうちょっと後にしたほうがいいという感じもあつたんです。（中略）

稲畑 重要な資料が隠されていたり、何か不都合なことがあって、口を閉ざさざるを得ないこともあるのでしょうか。

陳 そう。まだ公開されていない、だれかが握っている、あるいは気付かずにだれも調べようとしない資料、そういうものがどの時代における近・現代史の現場にも、ある。

私たちの今日でも、大分あると思います。例の文化大革命にしても、そうですね。（中略）まだ公開

されていない資料とか、口を閉ざしている当事者というのは、まだまだあると思うんですよ。

だから、私が中国の現代史を書くというのは、ちょっと時間切れかな。まあ、あと十年ぐらいだから、間に合うかもしれない…。

残念ながら、間に合いませんでした。

打ち切りの理由は、文化大革命よりも、むしろ、天安門事件でしょう。

中国の歴史 近・現代篇

全13巻 陳舜臣 写真・陳立人

定価＝各1,600円 A5縦型紙・各巻中500頁・カラー8頁

- 1 黄龍振わず 義和団前後 1986 年刊
- 2 落日に立つ 革命前夜 1987 年刊
- 3 黎明に燃ゆ 辛亥革命 1988 年刊
- 4 大同の夢 民国誕生 1991 年刊
- 5 疾風怒濤 五・四運動
- 6 雲は翔ぶ 国共合作と北伐
- 7 故園暗し 抗日戦(一)
- 8 山河尽きず 抗日戦(二)
- 9 劫波を渡る 抗日戦(三)
- 10 大江は東に流る 内戦と解放
- 11 無限の風光 大躍進と文化大革命
- 12 雷鳴やまず 文化大革命の終焉
- 13 いくたびかの青春 二十一世紀に向けて